

# ドイツの切手に現れた科学者、技術者達 (7) パラケルスス

*Scientists and Engineers in German Stamps (7). Paracelsus*

筑波大学名誉教授 原田 馨  
KAORU HARADA

*Professor Emeritus, University of Tsukuba.*



パラケルススの切手。西ドイツ発行。1947年。

## パラケルスス

パラケルスス(Paracelsus Philippus Aureolus, 本名 Theophrastus Bombastus von Hohenheim, 1493-1541)は、スイスのアインジーデルンで生まれたルネッサンス期の特異な医者、思想家であり、また化学者(錬金術者)であった。彼の家系はシュワーベン地方の貴族の家柄であり、彼の本名のあとに von Hohenheim と称するのは彼の一族がホーエンハイムに領地を持っていたことを意味する。現在ドイツのシュトゥットガルトに接するホーエンハイムの町にはパラケルススの名を冠したパラケルスス通り(Paracelsus Strasse)があり、パラケルスス・ギムナジウム(Paracelsus Gymnasium)と称する高等学校があった。パラケルススとホーエンハイムの町が歴史的にどのように関わっているかよく分からないが、ルネッサンス末期の特異な学者パラケルススの存在はホーエンハイムの人々にとって町の誇りであるに違いない。

パラケルススは幼少の頃から優れた教育を受け、16歳の時にバーゼル大学で医学と物理学を学んだ。彼はここで古い医学の伝統的理論及び実践的方法、すなわちアリストテレス、ガレノス流の医学における欠点を認めると共に、新しい錬金術(化学)を創始した。古代から中世に伝承された錬金術は基本的にはアリストテレスの原質説に基づくものであり、万物は土、水、空気、火の4原質の結合により生成していると考えられた。しかしパラケルススはこれに反し、生物を含む万物は水銀、イオウ及び塩から成ることを主張し、新しい錬金術的物質観を唱えた。それまでの錬金術の目的は、第一に高価な金属である金を得ること、第二に不老不死の薬を得ることであったが、パラケルススは錬金術の目的は患者の病気を癒す薬を創成することであると主張した。

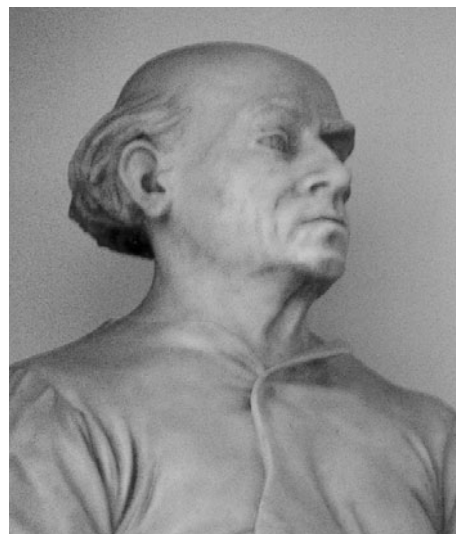
16世紀には無機の強酸が発見されたので、種々の塩類を入手することが可能になった時代であり、パラケルススはこれらの塩類を作ると共に、

医薬としての効果を患者に試みた。このようにして患者を病気から回復させるための医化学 (Iatrochemie) がパラケルススにより創始された。彼は医者であると共に化学者であった故に、彼の医化学の理論に基づく三原質論により独創的な試みを遂行することができた。金属としては水銀、銅、鉛、砒素、アンチモン、酸化鉄などを服用薬として利用し、種々のチンキ類も創った。彼のイアトロヘミーにより作られた薬品には、現在から見れば毒性の強いものが含まれているが、パラケルススの医薬品には、今までにない治療効果を示すものもあった。梅毒に対する水銀製剤がそれであった。パラケルススの理論は古い錬金術を否定し、医薬の製造こそが錬金術の本命であると主張したが、パラケルススの医化学は未だ中世の物質観の延長上にあり、新しい化学が出現するためには17~18世紀を待たねばならなかった。すなわち彼の医化学には、未だ魔術的、神秘的な概念によりその理論が形成されていた。自然界はパラケルススの三原質よりなると考えるので、生体も宇宙もまた三原質論の研究の対象となる。彼は生命現象は物質的变化に基づくものであるが、しかし内臓の各々の働きは太陽及び惑星が関与していると考えたが、ここには未だ占星術的宇宙観が存在している。

一般に受け入れられていたローマの医学者ガレノス及び、アヴィケンナ(イブン・スィナー)の医学体系に対するパラケルスス個人の挑戦はすさまじいものであり、これらの古典的医学の著作を人々の前で焼いたと云われる。若い時代に10年にわたりヨーロッパを遍歴した後に、彼はバーゼル大学に職を得たが、彼の古典的医学(アラビア医学)を攻撃した故に、職を放棄しなければならなくなり再びヨーロッパへの遍歴の旅に出ることになった。遍歴中のパラケルススは自分の説を教えると共に多くの新知識を吸収した。苦しい旅行中のパラケルススは病人を癒すことを仕事としたが、その際の彼の人物は、良心と愛に満ちたものであり、本質的に彼はキリスト教的ヒューマニストであった。このような旅の間にも論文を著述し、その著作の合計は364であると云う。パラケルススの著作は全12巻の全集にまとめられている。パラケルススを読解するには中世キリスト教世界の精神史、自然哲学を基本とする知識が必要である。

私は思いがけなく北ドイツのブレーメン市内でパラケルススの記念碑に遭遇したことがあった。彼はこのような北ドイツまで遍歴の旅を続けたのである。最後にザルツブルクに長く留まったのは町の司教に厚遇されたからである。ザルツブルクのセバスチャン教会 (Sebastian Kirche) の礼拝堂内に立派な墓があり、彼の滞在した家の記念板と共に白い大理石の座像がザルツブルクの市内にある。

※本稿に掲載の写真は、全て著者の撮影によるものである。



ベルリンの製薬会社「シェーリング」の文書館・歴史博物館にパラケルススの肖像があった。



北ドイツの都市ブレーメンの市内を歩いていた時、偶然パラケルススの記念碑を発見した。パラケルススは放浪の途中ブレーメンに立ち寄ったのである。

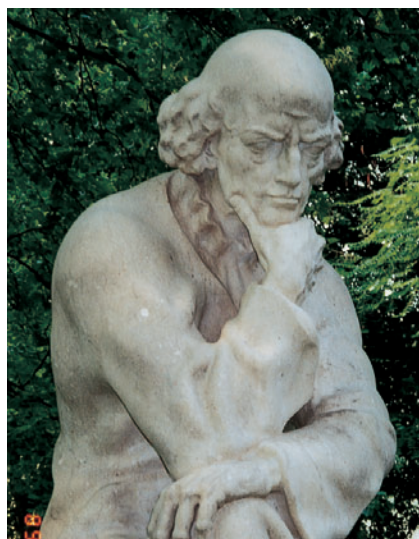


ザルツブルクのLinger-gasseのSebastian Kirche内にパラケルススの墓がある。高さは3m近い大きなもので、花束が献じられていた。

## ドイツの切手に現れた科学者、技術者達(7) パラケルスス



パラケルスス誕生500年を記念する切手。  
統合ドイツ発行、1995年。



ザルツブルクのパラケルスス温泉療養所の近くの公園に大きなパラケルススの白い大理石の座像がある。



画家Gabriel Metsu (1629-1667)によるパラケルススの肖像画(パリ・ルーブル美術館)(部分)。



ザルツブルクの市内に彼の肖像を画いた記念板がある。彼はここに1528-1541年の間居住していた。記念板が高い所に掲げられているので発見は容易でない。



画家David Scott (1806-1849)による「教師としてのパラケルスス」と題する絵(エジンバラ・スコットランド国立美術館)(部分)

### 表紙写真

#### アオノツガザクラ(ツツジ科)

花の色が桜のような淡いピンクで、針葉樹の梅に似た葉をしていることからツガザクラと名付けられたこの仲間の中で、これは花の色が黄緑色がかった白であることから、アオノツガザクラと呼ばれます。背丈は20cmにも満たないものですが、これも立派な樹木だそうです。時折この群落を見かけることがあり、毛足の長い絨毯に釣鐘状の花が付いたような雰囲気は見事なものです。

撮影地：立山・大日岳 (写真・文 北原)

### 編集後記

春先には初夏の様相を交え、また梅雨入りしたこの頃も夏本番かと思う暑い日が続きます。青葉の季節から冷えたビールと冷酒がうまいと感じるのは、読者諸氏もご同感ではないでしょうか。

本誌を読み易くするとの意図から、版をA4へと拡大し、文字を大きくしてから早や7号目。と同時に表紙を折々の高山植物で飾ろうと決め、読者諸氏には毎号を爽やかな気持ちで楽しくお読み頂ければと願っている次第です。

実のところ、編集委員に山と写真の愛好家があり、撮り貯めたファイルから逐次出品する手はずを組ん

だ、というも密かな理由の一つです。自称写真マニアとあって、本誌表紙のフレームに見事に収まった可憐な花々を次々投入。委員一同から感謝と安心の念を頂いております。

ところが題材の選定にあたりなかなか苦労も多い…と言う。その理由は、縦長や横長で撮り取めた草花も、本誌の四角なフレームに切り取れば、姿や風情が損われる、いつも締切日が近づくとも撮りなおしたい心境だ、とのこと。表紙を飾る花にも色々工夫を凝らし、皆様にお届けしたいと願って止みません。(古藤記)



関東化学株式会社

〒103-0023 東京都中央区日本橋本町3丁目2番8号  
電話 (03) 3279-1751 FAX (03) 3279-5560  
インターネットホームページ <http://www.kanto.co.jp>  
編集責任者 古藤 薫 平成16年7月1日 発行